市　政　会　行　政　視　察　調　査　報　告

平成29年11月17日

知立市議会議員　水野　浩

◆◆◆沖縄県名護市マルチメディア館「金融・情報特区事業について」

◆◆◆

第1日目平成29年11月8日　(水)

沖縄県名護市

市制施行	昭和45年8月1日
面積	210.90平方キロ
人口	62497人
世帯数	28,859世帯
数値は2017年4月30日　現在	

☆　マルチメディア館「金融・情報特区事業について」

【1】金融・情報特区とはなにか。

・金融とは、私たちの生活に影響が出ない範囲で物やサービスを交換するために、一定の約束ごとにより、お金を直接貸し借りし、また、お金を物やサービスを提供することにより、私たちの生活の支え、また、経済も支えている。　　たとえば、金融業には、銀行、証券会社などがある。

・IT(情報通信)とは、インターネットやコンピューターに関する色々な技術のことである。情報通信産業には、プログラミングやゲームソフトの開発、

コールセンターなどがある。

・金融・情報特区とは、金融や情報通信の仕事をする会社が、名護市内で仕事をしやすくするために、会社が払う税金が安くなる特別な地区。このように、**特別な地区のことを『特区』と呼ぶ。名護市の金融・情報特区は、日本で唯一の特別な地区であるため、どんどん金融業や情報通信産業の会社が集まってきている。**

【２】金融特区、情報通信特区に至った経緯について

これまでの沖縄県や、名護市での、主な産業は、『観光産業』や『農林水産業』などがある。沖縄は本土から遠いため、製造業などの産業は、あまり合いませんでした。しかし、『観光産業』や『農林水産業』は、台風や大雨など、天候で、うまくいったり、うまくいかなかったりなどがある。また、沖縄県の完全失業率は全国１位である。この状況を改善するために特区制度を採用し、沖縄経済の活性化をはかっている。

≪これまでの名護市の主な産業≫

農業・漁業・観光業	⇒	天候(台風・大雨など)に影響されやすい
製造業	⇒	物を本土に運ぶために時間・お金がかかる

⇓

≪解決策≫

・天候に影響されずに、物などを本土に運ばない新しい産業

名護市にとって『新しい産業』

情報通信産業(IT)・金融業

【３】具体的にどんな金融・情報通信関連の企業が、名護市に建てられたか。

平成14年に、金融情報特区に指定されてから、27社の会社が、名護市に来ていて、約1,000名（平成23年2月現在）の方々が、名護市内の会社で働いている。

・その金融情報通信会社とは、どのような仕事なのか。

①　【コールセンター】

会社が電話やメールなどを通じてお客からの問い合わせや注文を

受けたりする仕事。

②　【携帯コンテンツ制作】

携帯電話のサービスを制作している。例えば、マンガを携帯電話で見られるようにデータに変えている。

③　【データセンター】

銀行などの大切なデータを安全に保管・管理する仕事。

【４】現状と今後の課題について

全国平均の６％に比べて、名護市は２倍以上となる12.5％となっており、仕事を求めているけれど仕事につけない人が多くいる。そのため、新しい産業

を取り入れて、もっと働く環境を作る必要がある。

今後、名護市では、IT 企業や金融企業を呼び込むため、その環境を準備して、多くの若い人に「働く場所」をつくることに、力をいれています。

【５】所感

知立市も製造業は、不向きなまちである。自主財源を増やすためにも、何らかの産業が、必要であることは、言うまでもない。名護市の施策は、大変有益なのかもしれない。知立市も何事にも取り組み必要があります。

◆◆◆沖縄県那覇市「全国都市問題会議」について◆◆◆

第２日目　平成 29 年 11 月 10 日　金曜日

沖縄県那覇市

市制施行	1920 年 5 月 20 日
面積	39.98 平方キロ
人口	323, 064 人
世帯数	150, 304 世帯
数値は	2017 年 10 月 1 日　現在

①　基調講演　山本博文　師　東京大学教授

テーマ：多様性のある江戸時代の都市

基調講演では下記のような講演でした。

21 世紀が「創造の世紀」ということになるのであれば、多文化、多様性というものが主になってくると思います。そういう意味では、東京が首都として成り立ってきた時代の考え方とまるで正反対に近いような形でこれからの新しい首都は形成される必要があるのではないでしょうか。江戸時代には個性豊かな藩がありましたが、今日の日本の創造はある意味で江戸以来の遺産を食いつぶしているだけだと言っても言い過ぎではないと思います。20 世紀は国力がなければならない時代でもありましたので、国家統合や言葉の標準化をすること、大量生産、商品の大衆化などの時代だったのだと思います。そして、東京とはそうした時代に見合った首都だったと思います。

しかし、21 世紀になると、我々が想像もできなかった情報技術の進歩によって、従来のものを逆立ちさせるくらいの技術力が庶民の手の届くところとなりました。また、我々の良心、常識を覆してしまうほどにバイオ技術などが発達してきました。こうした中では、多様性にもとづいた生き方が非常に大事だという気がします。

□　主報告

ひと　つなぐ　まち－新しい風をつかむまちづくり

－沖縄県那覇市長　城間幹子－

はいたい。本市では「なはが好き！みんなで創ろう 子どもの笑顔が輝くまち」を基本 理念に、地域で支えあい、助け合える社会の実現を目指しています。 そのため「ひと つなぐ まち」というキャッチフレーズの下、「協働によるまちづくり」による取り組みを着々と進めています。というような報告を頂きました。

③　一般報告

・人口減少社会の実像と都市自治体の役割

－人口とインフラの適正な持続的配置はいかに可能か？－

首都大学東京大学准教授　　山下　祐介

・自然と都市が融合し共生が地域の価値を高めるまちづくり

北海道釧路市長　　蝦名　大也

・新たなステージに入った沖縄観光

－複合的な魅力を有するハイブリッドリゾートへ－

琉球大学　教授　　下地　芳郎

各講師からは、如何にして自分たちの「まち」を存続させるために、何をすべきなのか。具体例を示して頂き、分かりやすくお話を頂きました。

④　パネルディスカッション

ひとがつなぐ都市の魅力と地域の創生戦略

－新しい風をつかむまちづくり－

特に注目をされたパネリストは、「平田大一さん」であります。

1. 沖縄県の観光の転換期に現れた、“平成の躍奉行” 2011年に沖縄県に新設された「文化観光スポーツ部」の初代部長に42歳で抜擢される。小浜島に生まれ育ち、東京でアートに浸った、表現するシマンチュ。
2. 「沖縄エイサー」のスタンダードを生んだ詩人。沖縄が持つ深い精神性を、耳に聞こえる唄、目に見える踊りに変換する、詩人かつ演出家。
3. 「しまくとぅば（島言葉）を第二公用語に」など、島の独創的アイデアマン。

最大の敵は常識、最強の武器は若さ、と語り、観光立県プランを次々発案。

唄って踊る、地域活性家 日本中が「観光」で地域を盛り上げようとする（それしかない）最中、沖縄県は、観光で全国をリードする熱い存在だ。その「文化観光スポーツ部」のトップ、それが平田大一さんだ。石垣島の西の小浜島に生まれ、進学先の東京でアートに燃え、卒業後島に戻り、詩人・演出家等として活動。現代版「組踊（琉球王国の代表的芸能、ユネスコ無形文化遺産）」を制作する文化財団「TAO（タオ、中国語で道）Factory」を起ち上げ、助成金や補助金に頼らない地域興しと、それに必要な人材育成の仕組みをつくった。また、エイサーの曲「シンカヌチャー（仲間達）」の詞を宮沢和史氏、我如古より子氏と共作。その画像を見て、自分たちの踊りと唄で、会場全体が一体となって踊る様子に、沖縄の人が羨ましいと、つくづく僕は思った。琉球王朝の時代から、舞踊や民謡、料理などの琉球文化は、故郷の精神性を深いところから伝え残すものとして、また、異国と繋がるための〝国家・民族代表〟として、何よりも必要不可欠であっただろう。それを魂と言う人もいる。そのマブイを、平田さんは、目に見え耳に聞こえる唄や踊りに具象化させ、人々の身体と心を動かすことに成功。「時差を設定」「入県時にパスポート」など、本人いわく「夢想」も含んで、沖縄の未来像を次々と発想し、「今はまだ上り坂、だからブレーキは要らない、アクセルを踏むのみ」と言う平田さん。沖縄文化の熱い、若きリーダーである。

＊　知立市にもこのような熱き若者・リーダーシップを取れる方々に多方面に

おいて検証して頂きいと痛感しました。若い人たちの力は、得難いものであるとういうことも改めて理解しました。